



竹矢にゆがみがないかを確認する曾根宗次さん。仕上げ作業に神経を集中する。20日、焼津市東小川

匠を照らす

⑦ 焼津弓道具

大御所の遺産
家康公顕彰400年 探し

仕上げる作業は最も神経を使う瞬間だ。わずかなゆがみも許されない。まばたきを忘れるほど集中し、竹矢の向きや見る角度を少しずつ変えながら、一本一本入念に確認する。

ゆがみ調整 細心の注意

この道46年の矢師・曾根宗次さん(84)＝本名・成＝。曾根弓具店(焼津市)の小上がりで作業を行い、ゆがみの調整を終えると、職名「宗次」の判を打つ。竹矢に命を吹き込むとともに「自分

太平の世となった江戸時代、かつて戦場で使われた武器は独特の変化を遂げた。精神鍛錬のための弓道に、人々を魅しめる花火。のろしと同様の役割を果たした風(たこ)は、子どもの成長を願う玩具になった。徳川家とゆかりの深い県内でも、武器の平和利用が根付いていった。

の責任も生まれる」と身を引き締める。節の間隔や太さなどがそろっている複数の竹を選ぶところから作業が始まり、削りや漆塗り、羽根付けなど気の抜けない工程が続く。濃(の)んとした竹矢には、製作者の心が映し出されているかのよう。愛着を持ち、大切に使ってもらえる矢を、今後も作っていきたい。まだまだ熱い思いは尽きない。

(焼津支局・宮崎浩一、写真部・杉山英一)

①戦国の時代から太平の世に変わって武器はどんな変化をとげたでしょうか。
3つ書きましょう。

[
[
[

②弓を作る人は、弓矢に職名の判を打つ時、どんな気持ちになるでしょう。

[
[
[

③あなたの市町に伝わる伝統的工芸品を書きましょう。

[
[
[

2015年4月23日 夕刊

年 組 名前

(小学校中学年以上 社会・総合)